

新学習指導要領と私学(2)

— 2023年実施 全国私学アンケート調査結果と分析 —

令和6(2024)年 3月

一般財団法人 日本私学教育研究所

The Education Institute for Private Schools in Japan

目 次

刊行のことば

一般財団法人日本私学教育研究所理事・所長 平方 邦 行…………… 1

<第一章>

本書の構成、実施の目的、趣旨、実施状況、分析方法、「情報Ⅰ」の設置学年
一般財団法人日本私学教育研究所特任研究員 山崎 吉 朗…………… 7

『調査資料』の実践的活用法

—情報活用能力の育成に向けて—

神戸山手女子中学・高等学校校長 平井 正 朗……………17

<第二章>

私立学校におけるカリキュラムの独創性を創り出す手がかりの検討

—人文系・理数系のコース間の違いに着目して—

秀明大学 学校教師学部 専任助教 佐久間 大……………21

「言語能力の向上」に関する教科・科目間の連携における課題と現状

関西大学留学生別科 赤 桐 敦……………29

「言語能力の向上」に関するインタビュー調査

関西大学留学生別科 赤 桐 敦

一般財団法人日本私学教育研究所特任研究員 山崎 吉 朗……………37

私立学校における社会科の探究科目に対する取り組みと課題

東京工業大学環境社会理工学院 徳 竹 圭太郎……………59

英語以外の外国語教育と私学 (2)

—文科省の全国調査と私学アンケートとの比較—

一般財団法人日本私学教育研究所特任研究員 山崎 吉 朗……………69

全国私立学校の情報科の設置状況と ICT 機器を用いた教育活動の現状

東京工業大学環境社会理工学院 徳 竹 圭太郎……………85

学びの特色を創り出すカリキュラムマネジメントのプロセスモデルの開発

—学校評価と研修が生み出す創発性に着目して—

秀明大学 学校教師学部 専任助教 佐久間 大……………97

< 第三章 >

アンケート調査結果（１）— 評定の回答 —

編集作業 佐久間 大・山崎 吉朗……………111

アンケート調査結果（２）— 記述回答 —

編集作業 佐久間 大・山崎 吉朗……………143

< 第四章 >

2022年度（前年度）通信制アンケート結果 集計とグラフ（数量分析の結果）

— 評定の回答 —

編集作業 佐久間 大・山崎 吉朗……………335

『調査資料』の実践的活用法 —情報活用能力の育成に向けて—

神戸山手女子中学・高等学校校長 平井正朗

一般財団法人日本私学教育研究所が発行する『調査資料』は全国にある私立中高の特筆すべき実践報告集であり、すぐにでも役立つノウハウの宝庫と言える。ある意味、教員研修テキストになる。

筆者は教員研修のコンセプトを「教師は生徒の成長を支え、学校は教師の成長を支える」とし、スタッフの資質向上に資するカリキュラム・マネジメントの下、知徳体のバランスのとれた教育実践を展開している。教育研修のあり方は、求められる力に加え、教師自らが求める力に資する研修をデザインすることを軸とし、「本音トーク」を力量開発につなげている。これは生徒の成長や発達が教師によって保障されるのではなく、教師と生徒の相互の関係性の中で構築されるという考え方に基いている。多忙な教職員にとって、研修は Off-JT (Off the Job Training) よりも OJT (On the Job Training) が中心となるが、大切にしているのは、各地の“仲間たち”がどのような課題に直面し、解決してきたのか、そして、成長してきたかを吸収しながらスキルを向上させることである。



資料活用については、単なるテキストの紹介に終わらない。頃合いを見計らい、タイムリーな話題や事例を選び、会議等のあり方をスクラップ&ビルドして、ディスカッションする時間を捻出、企画・立案への背景知識を蓄える機会を設けている。いわゆるタイムパフォーマンスであり、働き方改革にも対応する。読み方は精読や速読、様々であるが、限られた時間内に読むことになるため、定例化していくと、集中度を高め、メモに取り、要約を書き出すなど、アクティブな読み方に変容していく。テキストを共有し、事前に読んでいただくこともしばしば。時には、質問を投げかけ、対話を盛り込む。サポートが必要な場合は、フィードバックや質疑応答を通じて理解を深める。準備段階では、関連する情報やデータをグラフ化したり、テキスト構造をマインドマップや図解して可視化することで活動をファシリテートする。状況によっては参考文献を示す資料も作成する。「仕込み」は授業準備と

同じなのである。

重視しているのは、PDCA を基本とし、『調査資料』を活用する目的を明確にすること、どのように情報を分析し、活かすか考えること、何度か読み返し、見落としを減らすこと、失敗を恐れず、行動に移すこと、結果をモニターし、必要に応じて計画や方法を調整すること、そして、継続的に改善を行い、共有することである。

英語教育に携わってきた関係上、スキヤニング (scanning) やスキミング (skimming) といった用語を持ち出すこともある。前者の scan とは「必要な情報を抜き取る→拾い読みする」の意であり、特定の情報を探す読み方である。5W1H が問われている時に有効である点を踏まえ、キーワードとほしい情報を本文から特定すれば速読速解の一助になる。後者は skim の語義である「すくい取る→ざっと全体を読み、概要がわかる→斜め読みする」が示す通り、大意をつかむ手法だけに『調査資料』の読解には馴染みやすい。教室では「常識」でも、いざ自分がやってみると新鮮に感じることもある。

今や、情報活用のツールと言えば、生成 AI が代表格だが、私学人の“魂”のこもった『調査資料』の理解を深めつつ、「何を教えるのか」という教材研究 (WHAT) と「どのように教えていくのか」という指導法研究 (HOW) を組み合わせ、チャレンジングな取り組みを試みてはじめてその利点を見出すことになる。そして、その積み重ねが熟練した教師を創り出していく。生徒の成長に立ち会えるのが教師の最大の喜びなら、教師の成長に立ち会えるのが学校の財産なのである。